

「油一」ウルトラマリンブルー

絵具の性能試験。

「理想的な油絵具」の研究と開発とに向かつて、私たちホルベイン工業と東京芸術大学油画技法材料研究室がまず始めたのが、いま市場に出ているさまざまな油絵具のテストでした。使用頻度の高い14色それぞれを13種類の塗り見本で、3種類の下地に塗るといふ、合計546枚の少し気の遠くなるような試験。我々はこの「官能評価塗布試験」と名付け、「外観」や「諧調」「描画」「混色」「表現」の五項目の視点から評価していきました。いわば絵具の描き心地を客観化していく作業とでもいえましようか。しかもこれは第一次試験でしかなく、このあと二次、三次と回を重ねる中

で次第に形になっていったのが、今度の新しい油絵具「油一」でした。発色がよく鮮やかで、亜麻仁油もベースに練り合わせたものであり、硬質に固まって乾燥する。肌理が細かく、粘着性が高く、画面に吸い付くような塗りになる。という特徴を持った絵具として誕生することになったのです。このことは取りも直さず、本来の油絵具そのものの特徴であり、いわば原点に戻りながらも、現代でしかできなかったことだといえるでしょう。

※「油一」(全30色)は、藝大プラザのみで販売中。
問合せ先/藝大アートプラザ
東京都台東区上野公園内12-8
東京芸術大学内
TEL.050(5525)2102

holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

holbein

大岩オスカル

林 洋子 || 文 森田兼次 || 写真「*」

地球 / 大都市を漂うフロートینگ・アーティスト



大学在学中に初めて旅した日本に、91年に移住。生活は苦しく、まだ日本の美術界にほとんど知己がなくて、ひとりで画廊や書店めぐりをしていた。背後は日本で制作した最初の作品

鯨I、II 1991 (第21回サンパウロ・ビエンナーレでのインスタレーション)
80年代に鑑賞者、スタッフとして関わっていたサンパウロ・ビエンナーレは、「美大には行かなかったけれど、僕の学校」。その憧れのステージに作家として初参加し、「大きいものを大きく描きたくて」、潜水艦と鯨の骨格を向き合う壁に対面させた

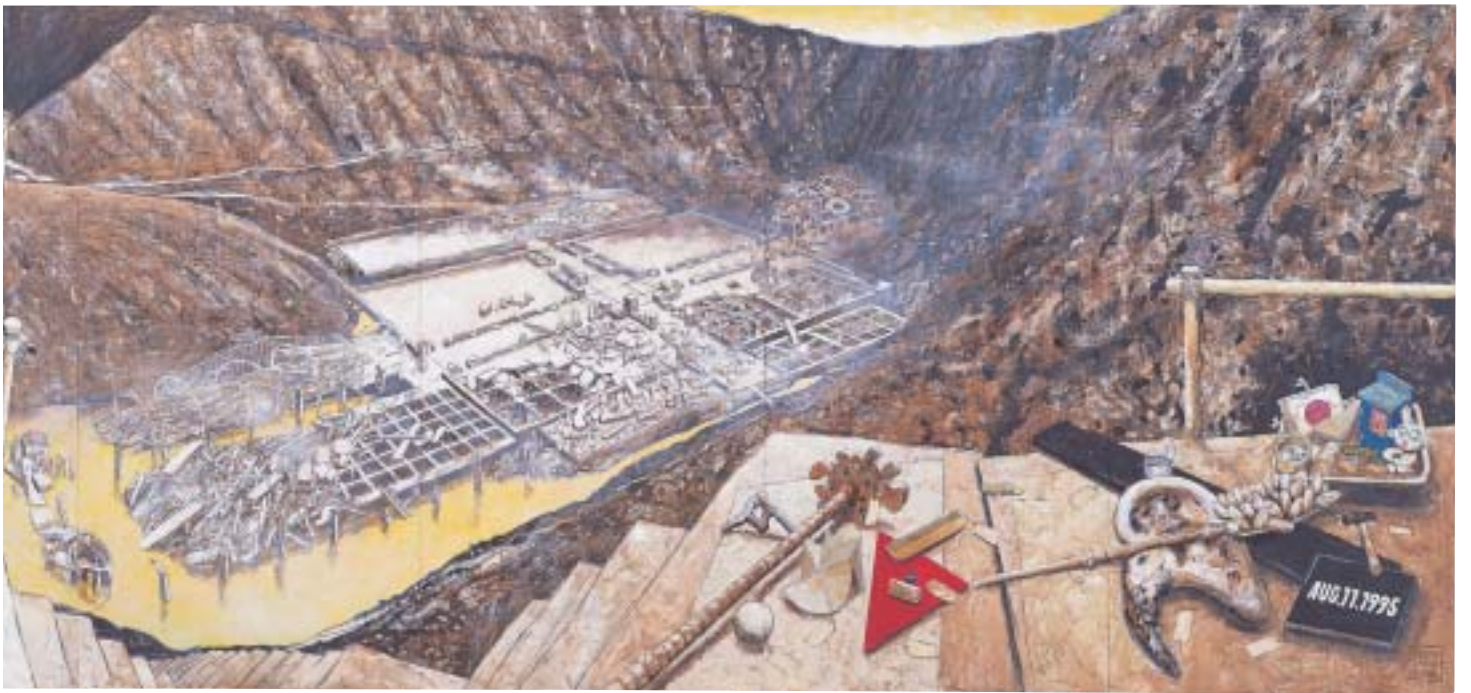


1991

「来日してすぐに、サンパウロ・ビエンナーレのためにいったん帰国。初めて作家として出品し、ブラジルでの本格デビューとなりました」

90年代前半のアートシーンで思い出されることのひとつに、今はなきスカイドアの存在がある。東京・表参道のビル地下、天井高に恵まれた美しい空間のギャラリー「スカイドア・アートプレイス青山」で、自主企画で若手作家の個展を活発に開いていたのに加え、批評誌や美術書も出版していた(残念ながら同社は2003年に活動をやめている)。新興だからこそ、既存の評価や経歴に関係なくフレキシブルな才能を、美術家に限らず評論家や研究者についても見出していた。そこから巣立った作家のひとつに、大岩オスカルがいる。ブラジル国籍で、母国語はポルトガル語。戦後にブラジルへ定住した両親のもと、サンパウロで生まれ育った日系二世である。

幼い頃から描くことが好きで、絵やマンガ、イラストのコンテストで次々と賞を攫^{さら}っていた早熟な少年は、中学時代、年長者に交じって美術専門学校へ通う機会を得たものの、雰囲気馴染めず、大学では建築を専



古代美術館 1995 ベニヤにアクリル絵具 182×546cm 豊田市美術館蔵
 設計図風のアクリル画とインスタレーションから、大画面の絵画に関心が移っていった時期の作品。支持体のベニヤの強度と横長の画面で、見る者を圧倒。タイトルとうらはらに、実際には20世紀美術の名品が並ぶ美術館の廃墟化した未来の姿を描き出す

1995 「ロンドンでのレジデンシーで、初めてヨーロッパに長期滞在したことをきっかけに、それまでアクリル中心だったのが、油彩を手がけるようになりました」

攻めた。一方で美術作品の制作も続けており、この時期にポップ、コンセプチュアル、抽象など様々なスタイルを通過したという。また、子どもの頃から両親に手を引かれ、サンパウロ・ビエンナーレに通つてもいた。フランスからの文化的影響が強い土地柄で、印象派コレクションで知られるサンパウロ美術館を擁するラテン・アメリカ屈指の文化都市。初めて日本人移民がブラジルへ渡ってから99年目にあたる現在、ブラジル国内の日系人の7割、約100万人がこの大都市に暮らす。1951年に始まったビエンナーレは、欧米の同時代美術の動向を紹介する南半球最大のアートイベントとなっている。大岩は85年にサンパウロ・ビエンナーレ財団のスタッフとして（作家としては91年）初参加。日本館の展示サポート兼通訳を務めた。この年の吉澤美香、そして87年の川俣正、89年の舟越桂と参加作家に直に接し、日本の現代美術界の動きに触れた。

1991年、バブル経済絶頂期だった両親の祖国へと生活の拠点を移

す。「そのままブラジルにいても、国際的なアートシーンに出にくかったから」といっても別段、日本に固執したわけではない。むしろ、「僕たち日系二世は、日本の教育を受けたわけではないから、日本を引きずるのはかっこよくない」と思っていたほどだ。好景気で職が得やすく、日系人なのでビザの障害がない。当時の彼にとって「一番行きやすい外国」だったのだ。昼は建築事務所で働きながら、夜や週末は画廊、図書館、池袋にあった美術専門書店アール・ヴィヴアンなどを徘徊して情報を集めつつ、美術界でのネットワークづくりを模索した。コンペにも積極的に応募していた。この時期に出会ったのが、前述のスカイドアと、東京・北千住の町である。ここにアトリエを構える。

1995年には、ロンドンのアーテ・イスト・イン・レジデンスで1年間を過ごした。名画やそこに描き出された風景を生身で体験し、その冬から本格的にキャンバス地に油彩で描き始める。色面中心の構成、ソフトフォーカスをかけたようなノスタルジックな



個展「アーバン・セル」(スカイドア・アートプレイス青山、1993)会場風景。東京の地図を拡大コピーした上に、合板に描いたアクリル画を並べた。合板を切り出した支持体=外形に、その内面、構造をグラフィカルに描いて充満させた、独特の浮遊感を持つ絵画は、鉛筆ドローイングにアクリルで彩色され、建築図面、設計図風だった



2002

「アメリカの財団から助成金を得て、家族でニューヨークへ。
国際的な美術マーケット、コレクター層の広がりを感じられました」



氷山 2007 キャンパスに油彩 227×444cm

表象が、画面上に浮かび上がった。
東京に戻ってから油彩作品を続け、やがて横長の、大画面の風景画へと展開していく。「映画のスクリーンのような」「見る者が入り込むような」「アンゼラム・キーファーのような」……迫力のある画面。そこには、戦前の佇まいを残す北千住の町並みが、濃厚に反映されていた。「北千住は、今でも僕の日本の実家です」。

この時期、スタジオ食堂や昭和40年会といった同世代作家たちとの交流やグループ展が続き、来日後10年ちよつとの間に経験した個展、グループ展は100回を超えた。が、ひとつの「クエスチョン」を抱えるようになる。同世代作家のなかでの自分の特殊さ——国籍が違うため、国際展では「日本の作家」として扱われず、公的機関からの経済的支援も期待しにくいという現実——に直面したのだ。

こうした「クエスチョンマークの未来」のなかで彼が考えたのは、「国際的に、数か所にマーケットの地盤をつくる」ということ。アメリカ合衆国



岐阜駅前には戦後発展した織維問屋街が広がる。そこから徒歩5分ほど、かつてラムネ工場だった建物を改装したギャラリーキャブションで、個展「North Pole」(6月30日-8月4日)を開いた。建築を学んだ大岩は、ギャラリーのリノベーションにもアドバイザーとして携わった[*]

への移住を決意。アジア系の作家を支援する財団などから助成金を得て実現する。「カバンにいろいろなアイデアを詰めて、それを売り込む旅」に出た先は、(9・11)直後のニューヨークだった。

それから5年が経過した。新しい生活環境に慣れるまでには時間を要したが、今では確実に制作数が増し、アートマーケットの好況もあってコレクター層は世界各地に広がっている。そして、疎遠となっていたブラ

ジル時代の人脈も回復しつつあるという。「(若いうちに)サンパウロから直接ニューヨークへ移ってゼロからスタートするよりも、いったんアートの地盤を東京でつくってからここに来てよかった」。ニューヨークは地理

おおいわ・おすかー 1965年ブラジル、サンパウロ生まれ。89年サンパウロ大学建築学部卒業。91年東京へ。95年デルフィナ・スタジオ・トラストのアーティスト・イン・レジデンスでロンドンに滞在制作。97年ポロック・クライズナー財団(アメリカ)の助成金を受ける。2002年ジョン・サイモン・グッゲンハイムメモリアル財団およびアジア・カルチュラル・カウンシルより助成を受け渡米、現在ニューヨーク在住。主な個展に93年スカイドア・アートプレイス青山(東京。95年も)、95年「Flower」(横浜美術館アートギャラリー、神奈川)、97年現代美術製作所(東京。98年も)、98年「エデンの園」(上野の森美術館、東京)、99年ギャラリー・モンテネー・ジロ(パリ、フランス。00、02年も)、00年フジテレビギャラリー(東京。02年も)、03年ガレリア・トーマス・コーン(サンパウロ、ブラジル)、06年「見えない反射」(池田20世紀美術館、静岡)、「大岩オスカルとガーデニング」(アリゾナ州立大学美術館、アメリカ)、07年「ファイアー・ショップ」(P.P.O.W、ニューヨーク)ほか。グループ展に91年「第21回サンパウロ国際ビエンナーレ」(ブラジル)、93年「ブラジルアートの今日」(フジタ・ヴァンテ、東京)、94年「ファール立川」パブリックアートプロジェクト(東京)、95年「VOCA展95 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」(上野の森美術館、東京 [奨励賞])、00年「空き地」(豊田市美術館、愛知)、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)、「The Gift of Hope—希望の原理」(東京都現代美術館)、02年「今、ここにある風景=コレクション+アーティスト+あなた」(静岡県立美術館)、03年「旅—「ここではないどこか」を生きるための10のレッスン」(東京国立近代美術館)、07年「File(s)」(エル・ムゼオ・デル・パリ、ニューヨーク)ほか。http://www.oscaroiwastudio.com/

的にも心理的にも東京とサンパウロの中間地点にあるようだ。

画家自身のウェブサイトには、「フラワー」「ミート」「戦争」「エコロジー」など18ものシリーズに分けて作品がアーカイブされている。モチーフは多様だが、未来と廃墟、生物と人工物、都市とガーデニングと、作品内に対照的なイメージが共存している。その個性を指摘すると、「文化的なコントラスト、めりはりが強い国で生まれ育った影響かもしれない」という。「たとえば光の明暗、色彩の濃淡、教育のある人となない人、戦争と平和とか」。作品を見ていると、いったいどこの国の作家がどこで描いているのか、宙吊りにされた感覚になる。インタビュの間、作家を目前にしてもやはり同じ印象だった。地球上の大都市を漂うフロアテイニング・アーティスト。来年は、「日本での実家」にも近い東京都現代美術館での個展を控えている。

◎はやし・ようこ「美術史・美術評論」
7月7日、岐阜市のギャラリー・キャブションでの個展会場で取材